



## 乳児に対する母親の反応と親の役割に関する自己意識の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸田, 須恵子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00008313">https://doi.org/10.32150/00008313</a>

## 乳児に対する母親の反応と親の役割に関する自己意識の研究

戸田 須恵子

北海道教育大学釧路校教育心理学研究室

### A study of mother's responsiveness and self-perception of the parental role

Sueko TODA

Department of School Education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

#### 要 旨

母子相互作用における認知の発達(言語・遊び)を生後5ヶ月から2歳まで縦断的研究をするため、第1子を持つ母親へ研究協力を求め、27組の母子が参加した(男児16名、女児11名)。本研究は、5ヶ月児への母親の反応、乳児の注意、親の役割に関する自己意識に焦点を当てそれらの関係を検討した。乳児が5ヶ月に達した時、家庭訪問を行い1時間の日常生活場面と母子遊び、一人遊びを30分観察した。日常生活場面では乳児行動と母親の反応について頻度数を分析し、母子遊びでは乳児の注意を1秒単位でマイクロ分析を行った。さらに、質問紙によって親となる事や子育て観に関する情報を得た。結果は、乳児は観察中ネガティブな声を出すことが多く、母親の反応については、社会的反応や養育的反応が多く見られた。乳児の注意については、おもちゃを見たり、母親の手元を見る時間が多かったが、周りを見る時間が最も多かった。男児はおもちゃを見ている時間が女児より長く、女児は母親との共同注意が男児より長かった。又、母親の反応との関係を見たところ、全体的には有意な関係は認められなかったが、男女差が見られた。男児においては、母親がネガティブな声に反応する事と乳児のおもちゃへの注意と正の相関が認められ、母親の声への模倣と母子遊びで母親に注意を向けることと正の相関が認められた。女児においては、ネガティブでない声への反応と母子遊びで母を見る事と負の相関が認められた。母親の役割に関する自己意識の結果は、親になる事において男女差が認められ、女児を持つ母親ほど親になった事に満足していた。又、男児において子育てについての自信・満足感と母親の養育的反応との間に負の相関が認められた。即ち、子育てに自信のない男児の母親ほど乳児行動に対して養育的行動で応えていることが明らかとなった。これらの結果はさらに、詳細な検討が必要である。

#### はじめに

初期の母子コミュニケーションにおいて母親が乳児行動にどのような反応をするかはその後の乳児の発達に影響する。母親行動は、乳児の状態によって変わり、又、乳児も母親の行動によって変わる。母子のやりとりは、その時その時の相手の行動や状態に反応しながら続いていく。従って、母子のやりとりが長く続くか短いかは母子のその時の状態にもよる。しかし、乳児とのやりとりを長く続けるには少なくとも母親が乳児の行動や状態を観ながら意図的に反応していくことが重要である。Snow (1977) が報告しているように、前言語期における母親のコミュニケーションを観察すると、母親は乳児のあらゆる状態に反応している

ことがわかる。Bell & Ainsworth (1972) は、泣きに対する母親の反応を縦断的に1年間観察した結果、乳児の泣きは母親の反応によって変化するが、母親の行動は乳児の行動によって影響することは少なく比較的一貫した行動であった事を報告している。Van Egeren & Barratt (2001) は、相手への反応のタイミングやコミュニケーションを続けていく為の制御力、どのような相互作用を行うかが重要であることを報告している。又、Hsu & Fogel (2001) は、母子コミュニケーションパターンを5つのカテゴリーに分類し (Symmetrical, Asymmetrical, Unilateral, Disruptive, Unengaged)、Syllabic Vocalの発達は釣り合いのとれた母子のコミュニケーション (Symmetrical) を生じさせやすい事を報告している。別の研究で、彼等は生後1ヶ月から

6ヶ月までの母子のコミュニケーションを観察し、コミュニケーションが安定していくプロセスにおいて、コミュニケーションの安定にはそれ以前にどのようなコミュニケーションをしてきたのが重要な要素であることを明らかにしている。

乳児の行動に母親がどのような反応をするかは文化によって異なるという研究もある (Bornstein & Tamis-LeMonda, 1989; Bornstein, Tamis-LeMonda, Ludemann, Rahn, Tal, Toda, Pecheux, Azuma, & Vardi, 1992; 戸田, 東, Bornstein, 1993)。Bornstein, Toda, Azuma, Tamis-LeMonda & Ogino (1990b) の研究によると、5ヶ月児への母親の反応を日米で比較したところ、日本の母親はアメリカの母親と比較して、社会的反応が多く、母親がおもちゃを見ている時にも名前を呼んだりして自分の方に注意を向けさせようとしているという行動特徴が見られた。さらに、別の研究では、日本の母親はアメリカの母親より乳児の声を模倣する傾向があることを報告している (Bornstein, Azuma, Tamis-LeMonda, & Ogino, 1990)。さらに、戸田等 (1993) は、このような乳児への反応が13ヶ月時の乳児の言語発達と関係があるか見たところ、5ヶ月時のおもちゃについての反応や養育反応は13ヶ月時の象徴的な遊びと有意な関係が見られ、模倣反応と言語理解との間にも有意な関係が見られたことを報告している。これらの研究は5ヶ月児を対象にしており、本研究はこれらの結果と比較するため同じ年齢で観察を開始している。

生後5ヶ月頃の乳児の行動は外界への好奇心も活発となり、何でも口に入れるという探索行動も活発になる。又、Vocalにおいてもいろいろな音を発声することを楽しむ時期である。Harding & Glinkoff (1979) は乳児の意図的な発声とその後の発達に重要であることを報告している。このような乳児の行動は、母子遊びにおいても見られ、このような乳児の行動に対して母親がどのような反応を示すかでコミュニケーションが変わっていく。遊びが長く続くためには母親の反応は重要であるが、同時に乳児がその反応行動に注意を向けることも重要である。それは、何回注意を向けたかというよりは、どのくらいおもちゃに集中しているかといった持続時間についても研究することが重要でそれは乳児の発達をより深く理解することにもなる。乳児行動における注意に関する研究は社会的、認知発達の面からも重要な役割を持っており、共同注意の発達によって心の発達、他者理解の発達があり、近年、心の理論研究等で注目されている。乳児は母親やおもちゃに注意を向けることによって興味や好奇心を誘発し認知の発達を促進したり、人とのコミュニケーションを発達させる。それは又、母子関係を発達させる上でも重要な役割を持っている。共同注意は言語獲得の基礎であり (Bruner, 1983)、ことばの学習においても対象への共同注意のなかで大人とのやりとりによってそれらが促進される (大神, 1999)。大神は共同注意を出現形態から追跡的共同注意、誘導的共同注意、共同注

意的かかわりの3種類に分類している (大神, 2004) が、それに基づくと本研究の共同注意研究は、共同注意的かかわりに入るだろう。本研究は、Bakeman & Adamson (1984) が述べているように、乳児と相手が一定の時間を保持しながら対象物を共有する状態を共同注意と定義する。Bakeman & Adamson (1984) は乳児がおもちゃに注意を向けたり、母親に注意を向けたりといった二項関係から一つの対象物を母子が注意を向けるといった三項関係への発達に沿ってカテゴリー化している。本研究は2歳までの縦断的研究であり、注意の発達を明らかにする意図もあり、彼等のカテゴリーを参考にしている。又、Silven (2001) は、生後3ヶ月及び6ヶ月時点での母子コミュニケーションにおける乳児の注意は12ヶ月時点で測定された発語と関係があったことを報告している。

このような母子のコミュニケーションで母親の行動は、母親自身の子育て観や親としての意識がどうであるかによって影響するのではないかと考える。子どもを持ったことで楽しいと答える母、それとは反対に子育てに時間をとられ自分のしたい事ができなくていららしていると答える母など様々である。柏木・若松 (1994) は子どもの発達と共に親も親としての成長があると考え、幼児を持つ母親を対象に研究し、子育て観に関して「育児への肯定感」、「育児による制約感」、「子ども分身感」の3因子を見いだしている。さらに、単に親としての成長と同時に自分の行動が制約されることへのストレスも生じていることを明らかにしている。又、幼児を持つ母親を対象にした母親の養育態度の研究では、養育態度は母親自身の子育て観、子どもの気質、パーソナリティ、家族観などによって影響されることを報告している (戸田, 1999)。このように母親の子育て観や母親としての自己意識も母自身の行動に影響していることが明らかである。親になることは子どもの誕生と同時に始まり、幼児期における母親の子育て観はそれ以前から持っているものであると考える。しかし、子どもの発達に応じてそのような子育て観や親としての自己意識は変化していくことも考えられる。本研究は、5ヶ月時の観察時に母親の役割に関する自己意識について調査し、20ヶ月時でもう一度同じ調査をし、その変化を検討する予定であるが、今回の分析は、実際の行動との関係を検討するため、20ヶ月時の調査は分析していない。

以上の先行研究から、本研究は、5ヶ月児への母親の反応と乳児の注意との関係、これらと母親の役割に関する自己意識との関係を検討することを目的とする。尚、この研究は生後5ヶ月～2歳までの母子相互作用の縦断的研究の一部である。

## 方法

被験者：4ヶ月健診時、釧路市内に在住の第1子を持つ母親に生後5ヶ月～2歳までの縦断的研究への協力を求めた。

33組の協力が得られたが、そのうち6組は遠方に転居したり、途中で参加を拒否した。最後の2歳まで観察協力が得られたのは27組であった(男児16名、女児11名)。誕生時の乳児の体重は平均3024.5g、身長49.32cmであった。5ヶ月時の乳児の年齢は平均155日(range 143日~179日)、母親の年齢は平均27.9歳(range 20~38歳)、父親は平均29.6歳(range 21~40歳)であった。又、母親の教育年齢は平均13.0年、父親は平均13.3年であった。

手続き: 生後5ヶ月から2歳まで家庭訪問によって観察を行った。観察は5、7、9、11、13、15、18、20、22、24ヶ月の計10回であった。生後5ヶ月時には、第1回目の観察であったので、1時間の日常行動と母子遊び20分、及び一人遊び10分を行い合計1時間30分観察した。母親には観察者がいないと思って普段どおりに振る舞うように指示した。母子遊びでは、観察者がおもちゃを提示し、そのおもちゃで遊んでもらうように指示した。使用したおもちゃは、2歳までのおもちゃとして適切と思われるおもちゃで先行研究(戸田他, 1993)と比較する意図もあって同じおもちゃを選んだ。使用したおもちゃは、ボール、人形、毛布(小)、

汽車、ポット、電話、バーレル 各一個、絵本2冊、カップ、皿、スプーン各2個であった。又、5ヶ月時の一人遊びは、家庭のおもちゃ7個で遊んでもらった。7ヶ月以降の観察では30分の母子遊びと10分の一人遊びを行いいずれも観察者が持ち込んだおもちゃで遊んでもらった。これらの観察はすべてビデオに撮り、ビデオからデータ分析を行った。本研究は5ヶ月時の観察データのみを対象に、日常生活場面1時間と母子遊び場面20分を分析した。さらに、第一回の観察日には、観察終了後、乳児や両親に関する基礎データを得た。

質問紙: 5ヶ月時では母親へ育児や母親としての役割などに関する質問紙を渡し、後日郵送してもらった。本研究では、多くの質問紙のうち、母親の役割に関する自己意識の質問紙のみを分析対象としている。質問は22項目で、回答は1) 全く当てはまらない~4) よく当てはまるの4段階評定であった。

データ整理: 母子の行動に関しては、日常生活での行動を撮ったビデオからコーディングした。分析対象の時間は60分であった。Table1に示した母子行動が発生した時にカウ

Table 1 母子の行動カテゴリー

カテゴリー	説明及び例
1. 乳児の行動	
母親を見る	母の顔を見る
おもちゃを見る	おもちゃを見る
ネガティブでない声	肯定的な声
ネガティブな声	泣き声やぐずり声
2. 乳児の行動への反応	
(1) 母親を見た時に反応	乳児が母を見た時に反応する
(2) おもちゃを見た時に反応	乳児がおもちゃを見た時に反応する
(3) ネガティブでない声へ反応	乳児が否定的でない声を出した時に反応する
(4) ネガティブな声へ反応	乳児が泣いたりぐずったりした時に反応する
3. 母親の反応の種類	
(5) 社会的反応	乳児の行動に対して乳児の顔を見たり、名前を呼ぶ
(6) おもちゃに関する反応	乳児の行動に対しておもちゃに関した反応をする。 例えばおもちゃを与えるなど
(7) 声の模倣	乳児が声を出した時にその声を模倣する。否定的な声も含む
(8) 養育行動	乳児の行動に対して養育的行動で反応する。例えば泣いた時抱き上げるなど
4. 乳児行動と同じ行動反応	
(9) 乳児が母親を見た時の社会的反応	母を見た時に乳児の顔を見る
(10) 乳児がおもちゃを見た時のおもちゃに関する反応	乳児がおもちゃを見ている時、そのおもちゃに関する反応をする。人形を見ている時、赤ちゃんかわいねと言うなど
(11) 乳児がネガティブでない声を出した時声で反応	乳児が発声した時、声で反応する
(12) 乳児がネガティブな声を出した時ネガティブな声で反応	乳児が泣いたりぐずったりした時に母もネガティブな声で反応する。乳児の泣き声やぐずり声の模倣も含む

ントした。又、乳児の注意に関しては、母子遊び場面に於ける乳児の視線を分析対象とした。乳児期の行動をマイクロ分析する場合、先行研究では3分、5分、10分、15分間など様々であるが、本研究では、15分間を分析の対象とし、乳児の視線を1秒毎の時系列で記録した（計900秒）。即ち、乳児の視線が変わった時にビデオを止め時間を記入し、頻度数と持続時間を計算した。注意のカテゴリーはBakeman & Adamson (1984) を参照して決めた。カテゴリーは次の7つである。1) おもちゃを見る－乳児が手に持っているおもちゃや目の前のおもちゃに焦点を当てている。2) 母を見る－母親の顔を見る。顔ではなく、他の部分を見た時にはカウントしない。3) 周りを見る－周りを見たり、観察者の方向などを見る。おもちゃを見ていてもそれが複数ありどのおもちゃに焦点を当てているか不明な時はこのカテゴリーに入れる。4) 母親の手元を見る－母親がおもちゃを持っていたり、おもちゃを差し出している時、乳児におもちゃの遊び方や使い方をモデリングしている時そのおもちゃを見る。モデリングしている時、共同注視とも解釈されるが、本研究ではこのカテゴリーに入れることにした。5) 消極的共同注視－母子ともに一つのおもちゃに注意を向けている場合で、母親が主導になっている場合。母親が絵本を讀んでいて乳児が熱心にそれを見ている場合や、おもちゃの使い方で、母親が子の手を持ってこうするのだと教え一緒に操作して乳児がそれに注意を向けている場合である（例えば電話のダイヤルと一緒に回す。母だけがモデリングする場合はカテゴリー4となる）。絵本読みの場合、乳児だけが絵本を見ており母親が離れてその様子を見ている場合はカウントしない。この乳児の注意はカテゴリー1にカウントする。6) 積極的共同注視－おもちゃを介して母子が対等なやりとりをしている場合。例えば、ボールを交互に転がしたり、毛布を使って相互にイナイナイバーをし合っている場合。一方的に母親がしている場合は含まない。7) 視線が不明－カメラから視線が見えない場合。さらに、乳児がおもちゃに集中して遊んでいる時に母親の介入がどのくらいあるか頻度数を算出した。乳児が集中して遊んでいる時の母親の介入は遊びの妨害と考え、妨害が多くなると乳児は遊べなくなるのではないかと予想したからである。母子行動の信頼性は15%のデータを使って訓練された2人の観察者が独立してコーディングをした。一致率はKappa = .94 (.91-.97) であった。

母親の役割に関する自己意識の質問紙に関しては、22項目を5つの因子にまとめた。因子は、「子育てについての知識欲」4項目、「子育てについての自信・満足感」5項目、「子どもを持つことに対する制約感」4項目、「子どもを持つことという事・子ども観」5項目、「親になるという事」4項目の5因子である。

## 結果と考察

### 乳児の行動と母親の反応について

Table 2～4には乳児行動及び母親の反応行動が示してある。Table 2を見ると、乳児の行動に対して母親は66%から

Table 2 乳児行動と母親の反応行動

	a. 乳児行動 (SD)	b. 母親の反応 (SD)	割合 (b/a)
1. 母親を見る	51.0(18.8)	34.0(14.7)	66.7%
2. おもちゃを見る	58.4(24.8)	44.9(33.8)	76.9%
3. ネガティブでない声	99.7(47.8)	78.6(48.1)	78.9%
4. ネガティブな声	60.8(32.8)	48.0(29.0)	78.9%

Table 3 カテゴリーにおける母親の反応の平均頻度数

カテゴリー	反応の頻度数 (SD)
5. 社会的反応	68.9(41.4)
6. おもちゃへの反応	24.4(20.0)
7. 模倣反応	17.0(14.4)
8. 養育的反応	46.2(29.9)

Table 4 乳児の行動に対する母親の反応の平均頻度数

カテゴリー	反応の頻度数 (SD)
9. 母を見た時の社会的反応	20.1(10.6)
10. おもちゃを見たときのおもちゃへの反応	14.9(12.7)
11. ネガティブでない声への声の反応	41.4(27.8)
12. ネガティブな声へのネガティブな声の反応	4.0(6.4)

78%の範囲で反応していることが分かる。乳児行動について見ると、ネガティブな声を出している頻度数が多いが、泣くと母親はミルクの準備をするために立ち上がり、乳児が泣いてもそのまま準備をしている場面が多々見られた。又、5ヶ月児の発声は連続的に発する声もあるが、1～2秒経過してから又発声するといった声の出し方に特徴が見られた。そのような発声は連続的とみなさないでその都度カウントしている。そのためネガティブな声の頻度数が多くなったとも考えられる。乳児行動に対する母親の反応がどのような反応かはTable 3に示してある。表を見ると、社会的反応が最も多く、次いで養育的反応である。Table 2との関係から見て、母親は、乳児が母親を見る時だけでなく、おもちゃを注視したり、声を発している時に社会的反応をしていることがわかる。先行研究 (Bornstein, et. al., 1990b) の日本の母親は社会的反応が多いという結果とも一致している。又、養育的行動では、ネガティブな声を発した時だけでなく、観察中にミルクを与えたり、おむつを替えたり、爪を切ったりする母親も見受けられた。Table 4は、乳児行動と同じ行動で反応する頻度数を見たものである。Table

2, 3 と合わせて見ると、乳児と同じ行動で反応する割合は少なくなる。しかし、乳児の行動と反応との関係を見るという行動においても有意な関係が認められた。これらの行動について先行研究（戸田他, 1993）の東京サンプルと比較すると、釧路サンプルでは、乳児のネガティブな声や母親を見る頻度数が多いのが特徴的であり、全体的に母親の反応する割合も多い。母親の反応率が高いことが母子のコミュニケーションが活発であると判断すべきかどうかはさらに詳しい分析をしていく必要があるだろう。子どもの行動に対して適切な反応をしているか、コミュニケーションが連続的であるかなどを明らかにする必要がある。今後の課題である。又、模倣に関しては同じくらいの頻度数である（東京サンプル15.8、釧路サンプル17.0）。先行研究では模倣と13ヶ月児の言語理解と関係があることを報告している。釧路サンプルで模倣と言語発達と関係があるかどうかは今後の分析課題である。

乳児の注意と母親の反応との関係について

Table 5 には、乳児の注意の持続時間と持続時間の範囲及

Table 5. 乳児の注視（持続時間と頻度数）

カテゴリー	時間(SD) (秒)	総時間数900秒	
		持続時間の範囲 (秒)	平均頻度数(SD)
おもちゃを見る	238.6(132.6)	10-642	31.2(14.6)
母を見る	32.9( 36.3)	0-166	8.7( 6.9)
周りを見る	279.7(109.7)	57-548	40.5( 9.4)
母親の手元を見る	223.1( 77.8)	53-339	28.9( 7.7)
消極的共同注意	110.0( 86.7)	0-261	7.4( 4.6)
積極的共同注意	0	0	0

び頻度数が示してある。表を見ると、おもちゃに注意を向けている時間は非常に長く、母親の手の動きに注意を向ける時間も長い。しかし、持続時間の範囲を見ると10秒と少ない乳児もいれば、642秒と2/3もの時間をおもちゃに注意を向けている乳児もあり個人差が大きい。乳児の行動を見ていると、自分の持っているおもちゃを手にしていろいろ探索している乳児もいれば、単に持って見ていたり、目的もなく叩いたりしている乳児もいる。又、生後5ヶ月では、何でも口にもっていく時期であり、手に持っているおもちゃを口でなめては、それを出して目で探索して再び口に入れる乳児もいれば、おもちゃを口に入れて熱心に長時間なめている乳児もいる。おもちゃを口に入れてなめている時、注意は比較的周りを見ている場合が多い。このような乳児のおもちゃを口に入れる行為に対し、「おいしい?」と聞き笑顔でそれを受容している母親もいれば、乳児がおもちゃを口に入れるとあわててそれを出させようと乳児の手を引っ張り、それを繰り返す母親もあり、このような母

親の介入に気分を悪くする乳児もいた。母子行動の個人差については今後の検討すべき課題である。又、母親への注意であるが、母子遊びの中での5ヶ月児の母親への注意は1~3秒くらいの持続時間が一般に多く見られ、まるで時々母親をチェックして行動しているといった特徴が見られた。数人の乳児は、比較的それ以上長く見ており、母親へ注意を向ける事に対して乳児の個人差が見られる。しかし、乳児の中でも普通は1~3秒であるが、一つの対象物でお互いが楽しんで遊んでいる時や、おもちゃに関して何か不思議さや驚きを母親に訴えているように思われる時には比較的長く母を見ているといった場面も見られた。おもちゃや母親に注意を向けることなく周りを見る行動でも個人差が見られ548秒と遊び時間15分の50%を周りを見ることで時間を費やしている乳児もいる。変数間の関係を見ると、周りを見る行動はおもちゃを見る行動や消極的共同注意と負の相関が認められた（おもちゃを見る $r = -.607, p < .001$ 、消極的共同注意 $r = -.414, p < .032$ ）。このような乳児は今後どのように発達していくのか見ていくことが必要かと思われる。又、母親の手元を見る時間も長い。これは母親が何をするのか敏感になっていることが示唆される。変数間の相関分析では、母の手元を見るとおもちゃを見るとの間に負の有意傾向が認められた（ $r = -.380, p < .051$ ）。本研究では、母親が単におもちゃを持っている場合、子どもにおもちゃを渡そうとしている場合、使い方などモデリングしている場合とすべて含まれている。しかし、母親がモデリングしている場合には、乳児がそれを学習する機会であることを考えるとさらに詳しく分析する必要があるだろう。5ヶ月児の消極的共同注意は、絵本読みが殆どであり、その他、乳児の手をもって一緒に行動するといった場面もこのカテゴリーに含まれる。中には母親が絵本へ注意を引こうとしても絵本に興味はなく観察時間内に絵本を一度も手にしない乳児もいた。積極的共同注意は5ヶ月の時点ではまだ発達しておらず、一つのおもちゃを介しての母子のやりとりが発達する三項関係は5ヶ月以降であると言える。今回の分析は注意に関してのみの分析であり、今後乳児の遊びの発達について検討していく予定であるが、質的な分析として15分の遊びの時間内にどれだけのおもちゃを使用したか等にも注目して注意時間との関係を検討する必要がある。注意の持続時間に性差があるのか分散分析を行った。その結果「おもちゃを見る」に有意差が認められた（ $F = 5.45, p < .028$ ）。男児の方がおもちゃを見ている時間が長かった（男児284秒、女児172秒）。又、「消極的共同注意」においても有意差が認められ（ $F = 4.61, p < .042$ ）、女児の方が共同注意の時間が長かった（男児5.7秒、女児9.8秒）。即ち、男児は女児より一人おもちゃで遊ぶ時間が長く、女児は母親とおもちゃを共有して一緒に遊ぶ時間が長いということである。

さらに、母親の反応と乳児の注意との関係を相関分析で検討した（両側検定）。その結果、すべての母親の反応変数

との間に有意な相関は認められなかった。しかし、乳児のネガティブな声への反応と注意の消極的共同注意とは負の有意傾向が認められた ( $r = -.363, p < .063$ )。即ち、乳児が泣いたりぐずったりしてそれに母親が反応するほど、母子遊びでは共同注意があまりないと言える。乳児がおもちゃや母親の手元にあまり注意を向けないことと消極的共同注意が少ない事とは負の相関が、おもちゃをあまり見ないことと負の相関が認められているので遊び場面においても泣いたりぐずったりして遊べていないことが示唆される。又、ネガティブでない声への反応と母子遊びでの母親の子への介入との間には負の相関が認められた ( $r = -.381, p < .050$ )。男女別で見ると、男児において、ネガティブな声への反応と乳児のおもちゃへの注意との間に正の相関が認められた ( $r = .630, p < .009$ )。さらに、母の声の模倣と母を見る事との間にも正の相関が認められた ( $r = .576, p < .020$ )。一方、女兒においては、ネガティブでない声への反応と母を見る事との間に負の相関が認められた ( $r = .692, p < .018$ )。即ち、日常生活で乳児のネガティブでない声によく反応する母親の乳児は母子遊び場面ではあまり母親を見ないという事である。又、母を見た時の反応と遊び場面での母親の手元を見る事との間に負の有意傾向が認められた ( $r = -.593, p < .054$ )。さらに、ネガティブな声への反応と消極的共同注意の間にも負の相関が認められた ( $r = -.602, p < .050$ )。日常生活で乳児の泣きやぐずり等に反応する母親ほど母子遊び場面で一つのおもちゃを共有して見るという事が少ないと言える。これらの結果は、全体としては母親の反応と乳児の視線との関係が見られなかったが男女別に見るとその関係が特徴づけられていることを示唆している。

### 母親の役割に関する自己意識

Table 6 には各因子の平均得点が男女別に示してある。こ

Table6. 母親の役割に関する自己意識

因子名	平均得点 (SD)	
	男児	女児
子育てについての基礎知識(4項目)	3.16(.44)	2.82(.64)
子育てについての自信・満足感(5項目)	2.42(.39)	2.64(.70)
子どもを持つ事に対する制約感(4項目)	2.38(.46)	2.34(.54)
子どもを持つという事・子ども観(5項目)	3.54(.28)	3.53(.61)
親になるという事(4項目)	2.75(.35)	3.23(.58)*

\* $p < .05$

れらの変数が男女別で違いがあるか一要因分散分析を行ったところ、「親になるという事」の因子に有意差が認められた ( $F = 7.16, p < .013$ )。女兒の得点は男児の得点より高く (男児2.75, 女児3.23)、女兒を持つ母親ほど親になった事に満足していると言える。

さらに、母親の自己意識が日常生活での乳児への反応と関係があるか関係を見たところ、「子育てについての自信・

満足感」と乳児がおもちゃを見た時に反応する頻度数と負の相関が認められた ( $r = -.418, p < .030$ )。又、「親になるという事」とネガティブな声への反応と正の相関が認められた ( $r = .419, p < .030$ )。親になったことに満足している親ほど乳児が泣いたりぐずったりした時にそれによく反応するという事である。これは、女兒の親よりも男児を持つ親ほどその行動が見られなかった ( $r = .630, p < .009$ )。一方、親になった事に満足している女兒の母親は乳児がネガティブでない声を出した時に多く反応するという結果であった ( $r = .621, p < .041$ )。さらに、「子どもを持つ事・子ども観」と乳児がおもちゃを見た時に反応する頻度数とは負の相関傾向が認められた ( $r = -.379, p < .051$ )。子どもを持ったことに不満を感じている親ほど、乳児がおもちゃを見てもあまり反応しないという事である。さらに、女兒では有意ではなかったが、男児で、「子育てについての自信・満足感」と養育的反応との間に負の相関が認められた ( $r = -.510, p < .044$ )。子育てに自信のない男児を持つ親は、乳児の行動に対して何かとすぐ養育的行動 (抱いたり、おむつを替えたり、ミルクを飲ませるなど) で反応するという事であろう。即ち、子育てに自信がないが故にどのように子どもと接していいかわからないといった状態ではなかろうか。一方、男児では有意ではなかったが、女兒で、「子育てについての知識欲」と乳児が母親を見た時とおもちゃを見た時の反応頻度数と正の相関が認められた (母を見た時  $r = .761, p < .006$ , おもちゃを見た時  $r = .655, p < .029$ )。さらに、「親になるという事」と模倣と正の相関が認められた ( $r = .681, p < .021$ )。即ち、女兒の母親では、子育てについて知りたいと思う親ほど乳児が母を見たり、おもちゃを見た時にそれによく反応しており、親になった事に満足している親ほど子どもが発する声に対して同じような声で反応 (模倣) しているという事である。

このような結果から、子どもを持ち、子育てしていく中で親としてどのように感じているかが、日常生活での行動に関係していることが明らかである。子育てに対して満足し、子どもとの遊びを義務的ではなく自分自身も楽しんで子どもとやりとりをしている母親は子どもの行動にも積極的に反応していることが示唆される。このような親に対して子どもはそれに応じて楽しく遊べるようになり、母子のコミュニケーションがさらに発達していくのかもしれない。生後5ヶ月と言えば、子どもは漸く睡眠など社会に適應してきた頃であるが個人差も大きく、既に5ヶ月で寝返りができ、這い這いができる乳児もいた。それぞれの母親が我が子の発達をどう受け止め、それにどう反応していくか今後の検討課題である。

引用文献

- Bakeman, R., & Adamson, L. (1984). Coordinating attention to people and objects in mother-infant and peer-infant interaction. *Child Development*, 55, 1278-1289.
- Bell, S., & Ainsworth, M. (1972). Infant crying and maternal responsiveness. *Child Development*, 43, 1171-1190.
- Bornstein, M.H., Azuma, H., Tamis-LeMonda, C., & Ogino, M. (1990a) Mother and infant activity and interaction in Japan and in the United States: I. A comparative macroanalysis of naturalistic exchanges. *International Journal of Behavioral Development*, 13, 267-287.
- Bornstein, M.H., Tamis-LeMonda, C.S., Tal, J., Ludemann, P., Toda, S., Rahn, C.W., Pecheux, M-G., Azuma, H., & Vardi, D. (1992) Maternal responsiveness to infants in three societies: The United States, France, and Japan.
- Bornstein, M.H., Toda, S., Azuma, H., Tamis-LeMonda, C.T., & Ogino, M. (1990b). Mother and infant activity and interaction in Japan and in the United States: II A comparative microanalysis of naturalistic exchanges focused on the organization of infant attention. *International Journal of Behavioral Development*, 13, 289-308.
- Bruner, J. (1983) *Child's Talk: Learning to use language*. New York: Norton.
- Harding, C.G., & Golinkoff, R.M. (1979) The origins of intentional vocalizations in prelinguistic infants. *Child Development*, 50, 33-40.
- Hsu, H., & Fogel, A. (2001) Infant vocal development in a dynamic mother-infant communication system. *Infancy*, 2, 87-109.
- Hsu, H., & Fogel, A. (2003) Stability and transitions of mother-infant face-to-face communication during the first six months: A micro-historical approach. *Developmental Psychology*, 39, 1061-1082.
- 柏木恵子・若松素子 (1994) 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み. *発達心理学研究*, 5, 72-83.
- 大神英裕監訳 (1999). *ジョイントアテンション* ナカニシヤ出版 C.Moore & P.J.Dunham (Eds.) *Joint Attention* (1995)
- 大藪泰 (2004). 第一章共同注意の種類と発達. 大藪泰・田中みどり、伊藤英夫編, *共同注意の発達と臨床* 川島書店 (pp.1-32)
- Silven, M. (2001). Attention in very young infants predicts learning of first words. *Infant Behavior & Development*, 24, 229-237.
- Snow, C. (1977). The development of conversation between mothers and babies. *Journal of Child Language*, 4, 1-22.
- 戸田須恵子・東洋・Bornstein, M.H. (1993) 13ヶ月の遊び・言語に及ぼす5ヶ月の母親の反応の影響 *発達心理学研究*, 4, 126-13.
- 戸田須恵子 (2001). 乳児の発達と母子相互作用の役割. *北海道教育大学釧路論集*, 33, 1-10.
- 戸田須恵子 (1999) 幼児の仲間関係に影響を及ぼす親の諸要因に関する研究. 平成8・9年度科学研究補助金研究成果報告書
- Van Egeren, L.A., & Barratt, M.S. (2001). Mother-infant responsiveness: Timing, mutual regulation, and interactional context. *Developmental Psychology*, 37, 684-697.

付記

研究にご協力してくださいましたお母様と赤ちゃんに深く感謝の意を表します。

資料1. 母親の役割に関する自己意識質問項目

子育てについての知識欲

1. 子育てに関する本を読む
5. 子育てについて何でも知りたい
9. 子育てについていろいろなことを知りたい
13. 最近の育児に関するアドバイスや方法について知っておくべきだ

子育てについての自信・満足感

2. 子育てについてはっきりした考えを持っている
6. 子どもが何を要求しているか理解することを知っている
10. 子どもの要求にうまく応じている
14. 子育てには自信がある
18. 自分はよい親である

子どもを持つ事に対する制約感

3. 子どもができてから友達と会い機会がなくなった
11. 自分の自由な時間が持たなくて腹が立つ
19. 子どもを持つことは自分の好きな事ができなくなる事だ
22. 自分の生活は子どもを持ったことで制約される

子どもを持つという事・子ども観

4. 子どもを持った事を後悔しない
7. 子どもを育てることは、犠牲というより別の得るものが多い
12. 再び子育てをすることになっても迷わず子育てを選ぶ
15. 子どもを持って夫婦のきずなは変わらない
16. 子どもは人生の喜びである

親になるという事

8. 親になるということは以前考えていたよりはよいものだ
17. 親のあり方については当然のことであまり悩まない
20. 親になることによって満足感を得られる
21. 親であることは簡単であり、当たり前なことだ